１−８　ドイツ文学

研究・教育活動の概要と特色

ドイツ文学専攻分野（以下，本研究室）は，1924年（大正13年）の設立以来，堅実な文献学的手法によるドイツ文学研究を研究・教育の基本として発展してきた。研究対象としては伝統的にゲーテやロマン派が中心であったが，初代教授小宮豊隆以来の比較文学的研究や，戦時中在職したカール・レーヴィットの影響を受け継ぐ思想系の研究などにも特色がある。現在のスタッフのうち，原はゲーテやムージルの研究で知られ，ドイツ・オーストリア文学全般に深い造詣を持つ。哲学出身の森本は，言語や芸術をめぐる理論的な研究を専門とする。05年度着任の嶋崎は，先端的な言語学の手法を取り込んだドイツ語学の研究者であると同時に，中世以来のドイツ語史にも詳しい。また外国人教員（教授）のシュミッツは，トーマス・マンやゲーテの研究者として，本研究室の中核であるドイツ文学の研究・教育を支えている。なお原とシュミッツは，沼田裕之（鎌倉女子大）とともに，ブルクハルト財団により編集が進められているブルクハルト全集の『イタリア・ルネサンスの文化』の巻の歴史校訂版編集に携わっている。

教育面においては，まずドイツ語力，特に文学的なテクストを正確に読む力の養成を主眼としている。伝統的な目標であるが，人文学研究のスキルとエトスを学ぶためには不可欠の要素であり，学生の多くもこの方針に満足している。同時に近年は，外国人教員を中心としたコミュニケーション能力の訓練に力を入れるとともに，学生の様々なニーズに応えるべく，スタッフの専門領域の幅広さを活かした授業内容の多様化に努めている。なお，本研究室のスタッフは，全学教育（一般教育）科目「ドイツ語」を担当するとともに，研究科および大学の教育関連諸業務において，ドイツ語の専門家としての立場から貢献している。

Ⅰ　組織

１　教員数（2008年 4月現在）

教授：3

准教授：1

講師：0

助教：1

教授：原研二、森本浩一、シュミッツ・ブリギッテ

准教授：嶋崎啓

助教：竹内拓史

２　在学生数（2008年 10月現在）

学部 （2 年次以上）	学部 研究生	大学院博士 前期	大学院博士 後期	大学院 研究生
26	1	4	5	0

３　修了生・卒業生数（2004～2008年度）　＊ は2008年9月修了者数

年度	学部卒業者	大学院博士課程前期修了者	大学院博士課程後期修了者（満期退学者）	博士学位授与者
04	2	0	0	0
05	6	1	2	0
06	0	2	0	0
07	6	2	0	0
08	-	1*	-	-
計	14	6	2	0

Ⅱ　過去5年間の組織としての研究・教育活動（2004～2008年度）

１　博士学位授与

１－１　課程博士・論文博士授与件数

年度	課程博士授与件数	論文博士授与件数	計
04	0	0	0
05	0	1	1
06	0	0	0
07	0	0	0
08	0	0	0
計	0	1	1

１－２　博士論文提出者氏名、年度、題目、審査委員

依岡隆児、2005 年度、『ギュンター・グラスの内省的語り―語りの構造と媒体性の考察』

審査委員：教授・原研二（主査）、教授・齊藤征雄、教授・森本浩一

２　大学院生等による論文発表

２−１　論文数

年度	審査制学術誌 (学会誌等)	非審査制誌 (紀要等)	論文集 (単行本)	その他	計
04	3	1	0	0	4
05	2	0	0	0	2
06	1	1	0	0	2
07	0	0	0	1	1
08	3	1	0	0	4
計	9	3	0	1	13

２−２　口頭発表数

年度	国際学会	国内学会	研究会	その他	計
04	0	0	0	0	0
05	0	2	1	0	3
06	0	1	0	0	1
07	0	3	8	0	11
08	0	3	9	1	13
計	0	9	18	1	28

２−３　上記の大学院生等による論文・口頭発表の中の主要業績

（１）論文

野内清香「『ニーベルンゲンの歌』におけるハゲネの人物造形」,『東北ドイツ文学研究』第 48 号，2004 年.

竹内拓史「削除された主題――『ヴォイツェク』の校正跡に見る描写の変化」,『東北ドイツ文学研究』第 48 号，2004 年.

川村和宏「ゲーテの『メルヒェン』について―象徴的な解釈とシュタイナー　の確信」,『東北ドイツ文学研究』第 48 号，2004 年.

野内清香・石川榮作「『ティードレクス・サガ』におけるグリームヒルトの復讐」,『徳島大学総合科学部紀要「言語文化研究」』第 13 号，2005 年.

川村和宏「エンデと『メルヒェン』――資料からみるエンデのゲーテ,『メルヒェン』受容」,『東北ドイツ文学研究』第 49 号，2006 年.

川村和宏「『メルヒェン』と『ファウスト』――ゲーテの『メルヒェン』を錬金術として読み解く」,『茨城大学独文学論集』第 2 号，2006 年.

嶋崎順子,『ジャン・パウル中短編集 II』（翻訳，恒吉法海・藤瀬久美子との共訳),

九州大学出版会，2007 年.

嶋崎順子「ジャン・パウルにおける比喩の諸相――『見えないロッジ』を中心に」，『東北ドイツ文学研究』第 51 号，2008 年.

川村和宏「書簡から見るエンデと貨幣論――『鏡の中の鏡』第四話執筆とゲゼルの利子論」，『東北ドイツ文学研究』第 51 号，2008 年.

渡辺美奈子「愛のない心とは …… 韻のない詩のようなもの――『冬の旅』から「おやすみ」の韻律と分析」，『東北ドイツ文学研究』第 51 号，2008 年.

渡辺美奈子「辻音楽師（ハーディ・ガーディ弾き）」，国際オルゴール協会日本支部編『自鳴琴』第 30 号，2008 年.

（２）口頭発表

野内清香「何故ハゲネはジーフリトを殺したのか」，日本独文学会春期研究発表会，2005 年 5 月 3 日.

川村和宏「エンデと『メルヒェン』」，東北ドイツ文学会第 48 回研究発表会，2005 年 10 月 22 日.

竹内拓史「ナチズムに利用された革命家――G・ビューヒナーの自然科学研究とナショナリズム」，平成 17 年度東北大学若手研究者萌芽研究育成プログラム採択課題:ポストコロニアルテクストのアイデンティティ表象比較文化史的研究・第 3 回研究発表会，2006 年 2 月 20 日.

川村和宏「エンデの『道しるべの伝説』に描かれる錬金術について」，東北ドイツ文学会第 49 回研究発表会，2006 年 11 月 3 日.

川村和宏「資料から見るエンデの貨幣論」，日本独文学会春期研究発表会，2007 年 6 月 6 日.

野内清香「『ニーベルンゲンの歌』のハゲネに見る異教の残映」，第 2 回ドイツ語圏文化研究会，2007 年 5 月 9 日.

渡辺美奈子「時代は芸術を支配する――ヴィルヘルム・ミュラーの詩と生涯」，第 4 回ドイツ語圏文化研究会，2007 年 5 月 25 日.

嶋崎順子「ジャン・パウル『陽気なヴッツ先生』におけるメタファーについて」，第 4 回ドイツ語圏文化研究会，2007 年 5 月 25 日.

八田卓也「薔薇十字運動概観」，第 5 回ドイツ語圏文化研究会，2007 年 6 月 8 日.

川村和宏「書簡から見るエンデと貨幣論――『鏡の中の鏡』執筆とゲゼルの利子論」，東北ドイツ文学会第 50 回研究発表会，2007 年 11 月 10 日.

嶋崎順子「ジャン・パウルにおけるメタファーの諸相――『見えないロッジ』を中心に」，東北ドイツ文学会第 50 回研究発表会，2007 年 11 月 10 日.

川村和宏「ヨーロッパ文化概論 III（集中講義）」，茨城大学人文学部，2008 年 2 月 11 日～2 月 14 日.

渡辺美奈子「ミュラー「冬の旅」における韻律」，第 11 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 1 月 11 日.

渡辺美奈子「愛のない心とは何か …… 韻のない詩のようなもの――『冬の旅』から「おやすみ」の韻律と分析」，ゲーテ自然科学の集い・東京例会（慶応義塾大学三田キャンパス研究室棟），2008 年 4 月 6 日.

川村和宏「ゲーテ『メルヒェン』と『ファウスト』冒頭部の照応について――錬金術としての解釈の可能性と意義」，第 13 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 5 月 9 日.

野内清香「『ニーベルンゲンの歌』における滅びの運命――ニーベルンゲン財宝と忠臣ハゲネ」，第 14 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 5 月 14 日.

橋本由紀子「自己点検的構成――ゲーテ『ファウスト第一部』の構成にみるバロック性」，第 15 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 5 月 28 日.

八田卓也「薔薇十字思想の系譜」，第 16 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 6 月 6 日.

加美山若菜「80 年代ジャーマンメタルの特性と位置づけ―― Accept を中心に」，第 17 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 6 月 20 日.

渡邉紀子「Ｅ・Ｔ・Ａ・ホフマン『自動人形』について」，第 17 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 6 月 20 日.

小田嶋大「ジークフリートとブリュンヒルデの死の非悲劇性―― R.ヴァーグナー『ニーベルングの指輪』終幕部における一解釈とヴァーグナーが志向した芸術作品」，第 18 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 6 月 27 日.

風岡祐貴「バッハマンと「猶予された時」」，第 18 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 6 月 27 日.

３　大学院生・学部生等の受賞状況

なし

４　日本学術振興会研究員採択状況

なし

５　留学・留学生受け入れ

５−１　大学院生・学部学生等の留学数

2002 年度～ 2004 年度　大学院　計 1 名　ハイデルベルク大学（ドイツ連邦共和国）

５−２　留学生の受け入れ状況（学部・大学院）

年度	学部	大学院	計
04	0	0	0
05	1	0	1
06	0	0	0
07	0	0	0
08	0	0	0
計	1	0	1

６　社会人大学院生の受け入れ数

年度	前期課程	後期課程	計
04	0	0	0
05	0	0	0
06	0	0	0
07	0	1	1
08	0	1	1
計	0	2	2

７　専攻分野出身の研究者・高度職業人

７−１　専攻分野出身の研究者

なし

７−２　専攻分野出身の高度職業人

2 名

８　客員研究員の受け入れ状況

なし

９　外国人研究者の受け入れ状況

Herbert Zeman（ウィーン大学），講演，2004 年 10 月 13 日.

Jaqueline Berndt（横浜国立大学），講演，2005 年 3 月 8 日.

Andreas Cesana（マインツ大学），講演，2005 年 10 月 4 日.

Jaqueline Berndt（横浜国立大学），シンポジウム，2005 年 12 月 21 日.

Beate Loeffler（ドレスデン工科大学，DAAD 奨学研究員），講演，2006 年 6 月 1 日.

Andreas Cesana（マインツ大学），講演，2008 年 2 月 27 日.

Hans Esselborn（ケルン大学），講演，2008 年 5 月 2 日.

１０　刊行物

『東北ドイツ文学研究』，毎年刊行

１１　学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催・事務局等引き受け状況

2004 年度

研究会：AGR フォーラム・第 8 回，2004 年 7 月 29 日，開催.

講演会：Herbert Zeman（ヘルベルト・ツェーマン，ウィーン大学教授），2004 年 10 月 13 日，開催.

学会：東北ドイツ文学会・第 47 回，2004 年 10 月 23 日，事務局.

研究会：AGR フォーラム・第 9 回，2004 年 12 月 17 日，開催.

2005 年度

講演会：Andreas　Cesana（アンドレーアス・チェザーナ，マインツ大学 教授），2005 年 10 月 4 日，開催.

学会：東北ドイツ文学会・第 48 回，2005 年 10 月 22 日，事務局.

シンポジウム：現代文化における「コミック」の遍在―その現状と意義（AGR フォーラム・第 10 回），2005 年 12 月 21 日，開催.

研究会：AGR フォーラム・第 11 回，2006 年 3 月 6 日，開催.

2006 年度

講演会：Beate Loeffler（ドレスデン工科大学，DAAD 奨学研究員），2006 年 6 月 1 日，開催.

学会：東北ドイツ文学会・第 49 回，2006 年 10 月 22 日，事務局.

2007 年度

講演会：副島美由紀氏（小樽商科大学教授），2007 年 10 月 26 日，開催.

学会：東北ドイツ文学会・第 50 回，2007 年 11 月 10 日，事務局.

ワークショップ：ナラティヴ・メディア研究会第 1 回ワークショップ，2008 年 2 月 9 日，開催協力.

講演会：Andreas　Cesana（アンドレーアス・チェザーナ，マインツ大学 教授），2008 年 2 月 27 日，開催.

2008 年度

講演会：Hans Esselborn（ハンス・エッセルボルン，ケルン大学教授），5 月 2 日，開催

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第 4 回研究会，2008 年 7 月 11 日，開催.

学会：東北ドイツ文学会・第 51 回，2008 年 11 月 15 日，事務局.

１２　専攻分野主催の研究会等活動状況

2004 年度

ドイツ文学研究室論文構想発表会，7 月 22 日.

2005 年度

ドイツ文学研究室論文構想発表会・第 1 回，7 月 27 日.

同　第 2 回，10 月 26 日.

2006 年度

ドイツ文学研究室論文構想発表会，11 月 30 日.

2007 年度

ドイツ語圏文化研究会・第 1 回，2007 年 4 月 18 日.

同　第 2 回，2007 年 5 月 9 日.

同　第 3 回，2007 年 5 月 11 日.

同　第 4 回，2007 年 5 月 25 日.

同　第 5 回，2007 年 6 月 8 日.

同　第 6 回，2007 年 7 月 6 日.

同　第 7 回，2007 年 10 月 24 日.

同　第 8 回，2007 年 11 月 2 日.

同　第 9 回，2007 年 11 月 9 日.

同　第 10 回，2007 年 11 月 30 日.

同　第 11 回，2008 年 1 月 11 日.

同　第 12 回，2008 年 2 月 20 日.

2008 年度

ドイツ語圏文化研究会・第 13 回，2008 年 5 月 9 日.

同　第 14 回，2008 年 5 月 14 日.

同　第 15 回，2008 年 5 月 28 日.

同　第 16 回，2008 年 6 月 6 日.

同　第 17 回，2008 年 6 月 20 日.

同　第 18 回，2008 年 6 月 27 日.

同　第 19 回，2008 年 7 月 18 日.

同　第 20 回，2008 年 7 月 25 日.

１３　組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

「研究・教育活動の概要と特色」で述べたように，ドイツ文学専攻分野（以下，本研究室）は，伝統的な文学研究を核としながら，現代の状況に対応すべく，文化・思想・言語といった方面での研究・教育活動を推し進めることを目標としてきた。

この目標は，研究面においてはほぼ達成されているものと考える。組織とはいえ，人文学の研究は研究者個々の活動によるものである。以下に記す所属スタッフの業績，特に科学研究費補助金の受給件数が多さが，研究の充実度を示している。また以上に挙げた研究室としての活動の中でも，外国人研究者を招聘しての講演会やシンポジウムの主催，学会・研究会等の開催など，この分野としては活発なものであると言える。当研究室は，東北ドイツ文学会（日本独文学会東北支部）の恒久的な事務局として，毎年研究発表会の企画・運営と研究誌の刊行を続けている。それ以外にも，英文・独文・仏文の垣根を払った合同の研究会である「AGR フォーラム」（AGR は，Anglist, Germanist, Romanist の略）や，東北大学情報科学研究科と連繋した「ナラティヴ・メディア研究会」など，領域横断的な学術活動においても，本研究室の教員は企画・運営の中心として活躍している。このように専攻分野の壁を超えた積極的な研究交流に力を入れてきたことは，高く評価できる点であると思われる。

ドイツ文学分野が構造的抱える問題として，従来，学生の少なさが挙げられていた。しかしここ数年は，修士課程への進学者と博士課程社会人研究者コースに入学する学生を得て，全体としては大学院の定員を充足する状況にある。ただ 2002 年度以来，課程

博士授与の実績がないことは反省点である。ただ現在も数名が準備中であり，指導に努めている。2007 年度からは従来の論文構想発表会の態勢を見直し，ドイツ語圏文化研究会として新たに研究室内部での発表機会を整備した。大学院生が口頭発表の技術を磨き討議の訓練を積むことを第一目的とするが，学部生に対しても研究上のよい刺激となっている。

かつて本研究室からは多くの研究者が育っていったが，近年，ドイツ語・ドイツ文学分野での研究職ポストが激減している影響を受けて，この５年間大学等への就職実績はない。修士課程修了後，民間企業等に就職することも常態化しており，今後もこの傾向は続くと思われる。そのため，研究室としても，学部卒業者および修士課程修了者への就職活動の支援に力を入れ，文学を学んだ学生を積極的に社会に送り出す態勢を整えつつある。数字には表れてこないが，こうした現実的対応は，目下の状況においては評価されてしかるべきものと考える。

学生数が少ないことは，教育指導上はメリットともなる。これも数字には表れないが，大学院学生に対しては，授業や読書会を通じて，学生個々の研究分野に関連したテクストをほぼマン・ツー・マンで講読するなど，きめ細かい教育指導を行ってきた。ドイツ語・ドイツ文学分野で研究者になることが難しく，大学院進学のインセンティヴが急激に低下している中で，この分野に関心を抱く数少ない若者をどのように育成するべきか，模索を続けている状況である。

なお学部においては，特に 1 年次学生に対して分野の魅力を積極的に紹介する努力を続けた結果，2005 年度以降，学生数が増加している。学部学生（研究生を含む）総数は，2002 年度 7 名，2004 年度 10 名であったが，2007 年度・2008 年度は 27 名となり，定員の上限に近づいている。授業でも，文学研究という核を重視しつつ，多様なニーズに応える工夫を重ねており，そうしたことが，学生の間で一定の評価を受けているものと推察される。

厳しい状況の中で，分野の存続・発展の方向性を模索しながら本研究室が行ってきたこの 5 年間の研究・教育両面における努力とその成果は，おおむね評価に値すると考えるものである。

Ⅲ　教員の研究活動（2004～2008年度）

１　教員による論文発表等

１－１　論文

HARA, Kenji: Melusine oder „die dritte Person“ - Zur Erzählweise Goethes am Beispiel

von *Die Leiden des jungen Werthers* im Vergleich mit seinen späten Erzähltexten -. 『ゲーテ年鑑』46, pp.1-18, 2004.

原研二『オーストリア小説を中心とする 20 世紀ドイツ語散文の言説分析』（平成 15-17 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書，研究代表者），42p., 2006.

HARA, Kenji: Die essayistische Konzeption *der Cultur der Renaissance in Italien*: Deutungen aus dem Vergleich der Marginalien mit der Inhaltsübersicht. In: *Unerschöpflichkeit der Quellen. Burckhardt neu ediert – Burckhardt neu entdeckt*. Hrsg. von Urs Breitenstein, Andreas Cesana, Martin Hug. Basel (Schwabe AG) 2007

森本浩一：脱自としての人間, 陶酔としての芸術――ハイデガーにおける存在論と芸術論の相関，原研二・佐藤研一・松山雄三・笹田博通編『多元的文化の論理―新たな文化学の創世へ向けて』、東北大学出版会， pp.91-111, 2005.

森本浩一『虚構の認知的効果および社会的機能に関する研究』（平成 16-17 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書，研究代表者），80p.， 2006.

森本浩一：「芸術＝反終焉論」の射程――芸術終焉論の現代的意味を考えるため に,『芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究』（平成 16-17 年度科学研究費補助金（基盤研究(A)）研究成果報告書,研究分担者（代表者：栗原隆）），pp.67-90, 2006.

森本浩一：知覚のリアリティ――『芸術としての力への意志』に見るハイデガーのアート哲学,『東北大学文学研究科研究年報』56，pp.107-131，2007.

森本浩一：「批評」の位相――文学を語ることはいかにして可能か，栗原隆編『芸術の始まる時，尽きる時』，東北大学出版会，pp.349-371，2007.

森本浩一：新旧論争と 17 世紀の「言語」観,『「新旧論争」に顧みる進歩史観の意義と限界，並びにそれに代わり得る歴史モデルの研究』（平成 18-19 年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書，研究分担者（代表者：栗原隆）），pp.1-20，2008 年.

森本浩一：表現によって現れ出るもの,『コミック研究のフレーム再考のために――研究方法の多様化と今後の展望――』（ナラティヴ・メディア研究会第 1 回ワークショップ報告書，編集代表者：森田直子（東北大学大学院情報科学研究科）），pp.61-67，2008 年.

Schmitz, Brigitte: Komplementäre Auffassungen zu Leben und Tod im dichterischen

Werk Thomas Manns, mit dem Schwerpunkt auf >Die Betrogene<.『東北大学文学研究科研究年報』53, pp.178-192, 2004.

Schmitz, Brigitte, „An-sich-selbst-zugrunde-Gehen und der Mangel an "Lebenswürdigkeit": Betrachtungen zu einem Aspekt der Selbstdeklassierung in Thomas Manns Werk am Beispiel seiner letzten Erzählung >Die Betrogene<." 原研二・佐藤研一・松山雄三・笹田博通編『多元的文化の論理――新たな文化学の創世へ向けて』, 東北大学出版会, 560p., pp.61-89, 2005.

Schmitz, Brigitte: Einige Betrachtungen zu stigmatisierten Charakteren im erzählerischen und theoretisch-essayistischen Werk Thomas Manns. 『東北大学文学研究科研究年報』55, pp.118-140, 2006.

Schmitz, Brigitte: Thomas Manns Sicht auf Hitler in Verbindung mit Manns Verhältnis zum Judentum (Teil I). 『東北大学文学研究科研究年報』56, pp.130-152, 2007.

Schmitz, Brigitte: Thomas Manns Sicht auf Hitler in Verbindung mit Manns Verhältnis zum Judentum (Teil II). 『東北大学文学研究科研究年報』57, pp.30-48, 2008.

Schmitz, Brigitte: Die Spuren Jacob Burckhardts in Thomas Manns Werk – vornehmlich in seinem Renaissancedrama *Fiorenza*. In: *Unerschöpflichkeit der Quellen. Burckhardt neu ediert – Burckhardt neu entdeckt*. Hrsg. von Urs Breitenstein, Andreas Cesana, Martin Hug. Basel (Schwabe AG) 2007. (Bd. 7 der Reihe: Beiträge zu Jacob Burckhardt. Hrsg. von der Jacob-Burckhardt-Stiftung Basel)

Schmitz, Brigitte: Thomas Manns Sicht auf Hitler in Verbindung mit Manns Verhältnis zum Judentum (Teil III). 『東北大学文学研究科研究年報』58, 印刷中, 2009.

Schmitz, Brigitte: Erscheinungsformen des „Dämonischen" im Werk von Thomas Mann – vornehmlich dargestellt am Beispiel des Doktor Faustus. 『ドイツ文学』, 印刷中, 2009.

嶋崎啓：ドイツ語現在完了形の歴史的変化.（博士論文）277p., 2004.

嶋崎啓：「私はその人を常に先生と呼んでいた」－日本語の指示語「コ・ソ・ア」についてー.『長崎県立大学論集』37 巻 4 号, pp.21-34, 2004.

嶋崎啓：他・再帰動詞と他・自動詞の意味的相違.『東北ドイツ文学研究』49 号, pp.115-137, 2006.

嶋崎啓：再帰動詞と他自動詞の歴史的変遷.『日本独文学会研究叢書 042 言語変化の諸相――うちとそと』, pp.57-66, 2006.

嶋崎啓：日独語対照・談話における話し手の聞き手に対する配慮.『西日本ドイツ

文学』18 号，pp.31-44，2006.

嶋崎啓：ロエスレル起草日本帝国憲法草案におけるドイツ語受動態の日本語訳.『ヨーロッパ研究』6 号，pp.23-63，2007.

嶋崎啓：中高ドイツ語『イーウェイン』における他・再帰動詞と他・自動詞.『東北ドイツ文学研究』51 号，pp.123-145，2008.

竹内拓史：削除された主題 ー『ヴォイツェク』の校正跡に見る描写の変化ー，『東北ドイツ文学研究』第 48 号，pp.77-95，2005.

竹内拓史：狂気の理由――ゲオルク・ハイム『狂人』,『東北ドイツ文学研究』第 49 号，pp.73-92，2006.

竹内拓史：マールブルク版『ヴォイツェク』批評―― Quellendokumentation と Debatte um den Woyzeck-Prozeß の部,『子午線――ゲオルク・ビューヒナー論集ー』第 6 号（日本ゲオルク・ビューヒナー協会），pp.17-27，2006.

１−２　著書・編著

鈴木隆雄（編集主幹）,原研二,土屋勝彦,土屋明人,鍛冶哲郎,松村國隆編『オーストリア文学小百科』，水声社，690p., 2004.

原研二編『ディアスポラの文学』(執筆担当部分：「シールズフィールドと分裂するアメリカ」pp.3-14)，日本独文学会，74p., 2004.

原研二（代表），佐藤研一，松山雄三，笹田博通編『多元的文化の論理』(執筆担当部分：第一章文学的形象化の論理「物語と死」pp.3-23)，東北大学出版会，56p., 2005.

原研二『物語と不在―十九世紀オーストリア小説とムージル』，東洋出版，388p., 2005.

森本浩一『デイヴィドソン――「言語」なんて存在するのだろうか（シリーズ・哲学のエッセンス）』，日本放送出版協会，127p., 2004.

嶋崎啓・島村賢一・嶋崎順子・中島邦雄・島浦一博『自然との共生の夢―エコロジーとドイツ文学―』鳥影社, 238p., pp.13-63, 2002.

岩田美喜・竹内拓史『ポストコロニアル批評の諸相』東北大学出版会，306p., pp.7-109，303-304，2008.

１−３　翻訳、書評、解説、辞典項目等

原研二：「バロックと演劇」ほか約 90 項目（項目執筆），鈴木隆雄（編集主幹）,原

研二,土屋勝彦,土屋明人,鍛冶哲郎,松村國隆編『オーストリア文学小百科』，水声社，2004.

原研二：ハルトムート・ベーメ「ゲーテとアレクサンダー.フォン.フンボルト―現れた関係と隠された関係」（翻訳），『ゲーテ年鑑』47, pp.139-172, 2005.

原研二：アンドレーアス・チェザーナ「ブルクハルトの目で見る歴史と文化 2005年10月4日東北大学での講演」，『東北大学文学研究科研究年報』55, pp.141-158, 2006.

原研二：アンドレーアス・チェザーナ『地球時代を生きる感性』（翻訳，沼田裕之・遠藤千晶・中澤武・別所良美・山崎高哉と共訳），東信堂，239p.，2007

森本浩一：ドイツ語圏におけるコミックとコミック研究・はじめに（解説），『東北ドイツ文学研究』48, pp.117-120, 2005.

森本浩一：行為としての文学的経験，財団法人ドイツ語学文学振興会編『ひろの』45, pp.20-21, 2005.

森本浩一：言葉を嫌悪してはいけない，東北大学フランス語フランス文学会編『フランス文学研究』第26号，pp.15-17，2005.

森本浩一：アイロニー，隠喩，カフカ，デイヴィドソン，ユーモア，レトリック（項目執筆），大庭健編集代表『現代倫理学事典』，弘文堂，pp.5-6,58-59,120,603,643,886-887，2006.

嶋崎啓：ハンス・パーシェ『アフリカ人ルカンガ・ムカラのドイツ奥地への調査旅行』（翻訳，中島邦雄・島浦一博・島村賢と共訳），鳥影社，134p.，pp. 72-89, 2005.

嶋崎啓：Yasushi Kawasaki: Eine graphematische Untersuchung zu den Heliand-Handschriften（書評），『京都大学大学院人間環境学研究科人環フォーラム』18, p.68, 2006.

嶋崎啓：ドイツ語の史的研究・はじめに（解説），『東北ドイツ文学研究』51, pp.83-86，2008.

１－４　口頭発表

原研二：Die essayistische Konzeption der «Cultur der Renaissance in Italien»: Deutungen aus dem Vergleich der Marginalien mit der Inhaltsuebersicht, 国際ヤーコプ・ブルクハルト学会（スイス、バーゼル），招待講演，2006年9月.

原研二：歴史の可能性と物語の可能性――ヘルダー、ゲーテ、ブルクハルト（ブルクハルト校訂版全集編集の現場から）, 2006 年日本ヘルダー学会秋季研究発表会シンポジウム，特別講演，2006 年 11 月.

森本浩一：芸術終焉論を読み解く，日本ヘーゲル学会第３回研究大会シンポジウム，コメンテーター，2006 年 6 月.

Schmitz, Brigitte: „Endzeiten – Zeitenden. Diskurse über das Ende“ Arbeitsgruppe 1A (Arbeitstext: Thomas Mann: *Doktor Faustus*), 日本独文学会･第 48 回蓼科ゼミナール, 部会主宰，2006 年 3 月.

Schmitz, Brigitte: „Die Figur des Gastes – weder Feind noch Freund“ Arbeitsgruppe 4A (Arbeitstext: Thomas Mann: *Der Tod in Venedig*), 日本独文学会･第 49 回蓼科ゼミナール, 部会主宰，2007 年 3 月.

嶋崎啓：日独語における視点と共感，日本独文学会西日本支部第 56 回研究発表会，口頭発表, 2004 年 11 月.

嶋崎啓：他動詞の反使役化の諸相――再帰動詞と他自動詞を中心に, 京都ドイツ語学研究会，口頭発表，2005 年 9 月.

嶋崎啓：再帰動詞と他自動詞の歴史的変遷，日本独文学会 2005 年度秋季研究発表会シンポジウム「言語変化の諸相――うちとそと」，パネル，2005 年 10 月.

嶋崎啓：歴史的に見た未来形 werden ＋不定詞, 日本独文学会 2006 年秋季研究発表会シンポジウム「歴史的に見た現代ドイツ語」，パネル，2006 年 10 月.

竹内拓史：ナチズムに利用された革命家―― G・ビューヒナーの自然科学研究とナショナリズム，平成 17 東北大学萌芽研究育成プログラム採択課題:ポストコロニアルテクストのアイデンティティ表象比較文化史的研究第 3 回研究発表会，口頭発表，2006 年 2 月.

竹内拓史：マールブルク版『ヴォイツェク』テクスト・クリティーク，日本ゲオルク・ビューヒナー協会第 8 回研究発表会，谷口廣治との共同口頭発表，2006 年 6 月.

竹内拓史：「クラールスの鑑定書」と「シュモリング鑑定書」について――その訳出上の問題点を中心に，日本ゲオルク・ビューヒナー協会第 9 回研究発表会，口頭発表，2007 年 6 月.

竹内拓史：ヴォイツェク裁判について――クラールス鑑定書の解題との関係で, 日本ゲオルク・ビューヒナー協会 2007 年度秋期研究発表会，口頭発表，2007

年 10 月.

２　教員の受賞歴（2004～2008年度）

原研二：第二回オーストリア文学研究会賞（『オーストリア文学小百科』編集主幹鈴木隆雄，に対して），オーストリア文学研究会，2006 年.

原研二：第三回オーストリア文学研究会賞，オーストリア文学研究会，2007 年.

Ⅳ　教員による競争的資金獲得（2004～2008年度）

（１）科学研究費補助金

2004 年度

原研二（研究代表者）：基盤研究(C)「オーストリア小説を中心とする 20 世紀ドイツ語散文の言説分析」，600,000 円

森本浩一（研究代表者）：基盤研究(C)「虚構の認知的効果および社会的機に関する研究」，1,400,000 円

森本浩一（研究分担者）：基盤研究(A)「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究」，570,000 円

2005 年度

原研二（研究代表者）：基盤研究(C)「オーストリア小説を中心とする 20 世紀ドイツ語散文の言説分析」，600,000 円

原研二：平成 17 年度科学研究費補助金・研究成果公開促進費，1500,000

森本浩一（研究代表者）：基盤研究(C)「虚構の認知的効果および社会的機能に関する研究」，600,000 円

森本浩一（研究分担者）：基盤研究(A)「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究」，575,000 円

2006 年度

森本浩一（研究代表者）：基盤研究(C)「虚構における物語認知の比較ジャンル論的研究」，1,600,000 円

森本浩一（研究分担者）：基盤研究(B)「『新旧論争』に顧みる進歩史観の意義と限界、ならびにそれに代わり得る歴史モデルの研究」，529,000 円

2007 年度

原研二（研究代表者）：基盤研究（C)「19 世紀のドイツ語の歴史記述と物語記

述の比較分析研究」，1,950,000 円

森本浩一（研究代表者）：基盤研究(C)「虚構における物語認知の比較ジャンル論的研究」，1,04,000 円

森本浩一（研究分担者）：基盤研究(B)「『新旧論争』に顧みる進歩史観の意義と限界、ならびにそれに代わり得る歴史モデルの研究」，555,000 円

Schmitz, Brigitte（研究分担者）：基盤研究（C)「19 世紀のドイツ語の歴史記述と物語記述の比較分析研究」

2008 年度

原研二（研究代表者）：基盤研究（C)「19 世紀のドイツ語の歴史記述と物語記述の比較分析研究」

森本浩一（研究代表者）：基盤研究(C)「虚構における物語認知の比較ジャンル論的研究」，780,000 円

Schmitz, Brigitte（研究分担者）：基盤研究（C)「19 世紀のドイツ語の歴史記述と物語記述の比較分析研究」

嶋崎啓（研究代表者）：基盤研究(C)「ドイツ語における文法化現象の実証」，1,300,000 円

（２）その他

2006 度

竹内拓史（研究分担者）：東北大学萌芽研究育成プログラム――ポストコロニアルテクストのアイデンティティ表象比較文化史的研究，2,000,000 円（2005 ～ 2007 年度全体額）

2007 度

竹内拓史（研究分担者）：同上

Ⅴ　教員による社会貢献（2004～2008年度）

原研二（2004 年度）：文学研究科高大連携講座，企画および運営，東北大学川内北キャンパス，2004 年 8 月 2 日～ 2004 年 8 月 6 日

原研二（2004 年度）：みやぎ県民大学，全体の企画運営および講演，東北大学文学部大講義室，2004 年 8 月～ 9 月

原研二（2005 年度）：仙台日墺協会での講演会「ウィーン　文化の万華鏡」，講師，

仙台ホテル，2005 年 6 月 27 日

森本浩一（2007 年度）: 平成 19 年度第 1 回仙台電波高等専門学校専攻特別講義（第 143 回定例談話会）「メタファーを考える」，講師，仙台電波高専，2007 年 5 月 18 日

嶋崎啓（2006 年度）: 武蔵台高等学校キャンパスセミナー講演，講師，福岡県立武蔵台高校，2006 年 7 月 31 日

竹内拓史（2006 年度）: 利府高等学校講演会「ドイツの現代事情について」，講師，宮城県立利府高校，2006 年 11 月 1 日

原研二，Schmitz, Brigitte（2008 年度継続中）: 校訂版『ブルクハルト全集（イタリア・ルネサンスの文化）』の編集， J. Burckhardt: *Die Cultur der Renaissance in Italien*, JBW [Jacob Burckhardt Werke, Kritische Gesamtausgabe, 27 Bände, Bd. 4, München (C. H. Beck) / Basel (Schwabe AG) 2000 ff.]

Ⅵ　教員による学会役員等の引き受け状況（2004～2008年度）

原研二

日本独文学会東北支部長（2003 ～ 2007 年度）

東北ドイツ文学会会長（2003 ～ 2007 年度）

日本ゲーテ協会理事（2003 ～ 2007 年度）

ゲーテ賞選考委員（2003 ～ 2006 年度）

日本独文学会賞選考委員（2005 ～ 2006 年度）

森本浩一

東北ドイツ文学会委員，『東北ドイツ文学研究』編集委員（2003 ～ 2007 年度）

日本独文学会東北支部長（2008 年度）

東北ドイツ文学会会長（2008 年度）

嶋崎啓

東北ドイツ文学会委員，『東北ドイツ文学研究』編集委員（2005 ～ 2008 年度）

日本独文学会語学ゼミナール実行委員（2006 ～ 2008 年度）

日本独文学会編集委員（2008 年度）

竹内拓史

東北ドイツ文学会事務局（2006 年～ 2008 年)

日本ゲオルク・ビューヒナー協会編集委員（2007 年）

日本ゲオルク・ビューヒナー協会事務局長（2008 年）

Ⅶ　教員の教育活動（2008年度）

（１）学内授業担当

１　大学院授業担当

原研二

ドイツ文学研究演習I　「19世紀の歴史記述と物語」

森本浩一

ドイツ文化学特論III, IV　「ドイツ文学／文化学研究の基本問題」

ドイツ文化学研究演習I, II　「批評演習」

シュミッツ，ブリギッテ

ドイツ文学特論I, II　「Thomas Mann und Heinrich Mann／Thomas Mann, Heinrich Mann und Zeitgenossen」

ドイツ文化学研究演習III, IV「Peter Handk」

嶋崎啓

ドイツ文化学特論I, II　「中高ドイツ語講読」

２　学部授業担当

原研二

ドイツ文学各論 I　「ヒトラーと白いバラ」

ドイツ文学演習 I　「19世紀の歴史記述と物語」

森本浩一

人文社会総論（1回）

ドイツ文学概論I, II　「ヨーロッパ文学とその文化的背景」

ドイツ語学各論　「カフカを読む」

ドイツ語学演習I, II　「批評演習」

嶋崎啓

人文社会序論　「２セメからはじめるドイツ語」

ドイツ語学概論I, II　「中級ドイツ文法」,「ドイツ語史入門」

ドイツ語学各論　「中高ドイツ語講読」

シュミッツ，ブリギッテ

ドイツ語学基礎講読I,II　「ドイツの様々な顔」

ドイツ文学演習III，IV　「ドイツ語圏の作家たちの日記」

ドイツ語学演習III,IV　「ドイツ文化の諸相――文学との関連を重視しつつ」

３　共通科目・全学科目授業担当

森本浩一

基礎ドイツ語 I,II

嶋崎啓

基礎ドイツ語I,II

ドイツ語科教育法I,II　「ドイツ語の教授法研究」

シュミッツ，ブリギッテ

展開ドイツ語I,II

（２）他大学への出講（2004～2008年度）

なし